2016/4/13

# ＊宗教改革演習 （キリスト教学専修）

＜オリエンテーション＞

場所：キリスト教学研究室

時間：前期水３

担当者：芦名定道、須藤英幸、南翔一朗

## Ａ．授業の概要と目的

マルティン・ルターの 95 ヵ条の提題（1517 年）から始まった宗教改革は、あと数年で 500 周年を迎えようとしている。宗教改革はキリスト教界内の出来事に止まらずに、その影響は、西洋世界のあらゆる領域に深く浸透しており、その意義はまさにグローバルと言わねばならない。

本演習は、この宗教改革に関する文献を実際に読み進めることを通して、宗教改革についての基礎から始めて、さらに進んだ理解を目指している。

受講者は、指定テキストの担当箇所を中心に、毎回予習を十分に行い、受講することが求められる。前半での英語のテキストと後半でのドイツ語のテキストの双方を理解するために語学力の向上に努めていただきたい。

また授業の後には、授業中に紹介される関連文献などによって発展的な学習を行うことが望まれる。

## Ｂ．授業計画

演習は、初回のオリエンテーション（芦名教授担当）からスタートし、前半（７回）は、須藤英幸講師により、Steven Ozment,"The Age of Reform, 1250-1550: An Intellectual and Religious History of Late Medieval and Reformation Europe" が講読される。テーマは、宗教改革に先行する中世思想史との関わりにおける宗教改革である。

後半（７回）は、南翔一朗講師により、Johannes Wallmann, "Kirchengeschichte Deutschlands seit der Reformation(7.Auflage)." が講読される。特に、Dritter Abschnitt: Das Zeitalter des Pietismus und der Aufklärung のなかの II Die Aufklärung が扱われる予定であるが、宗教改革から近世への思想的展開（18 世紀ドイツの啓蒙主義的な神学など）が、後半の主要テーマである。

１．オリエンテーション　4/13

２．須藤：　4/20, 27, 5/11, 18, 25, 6/1, 6/8

３．南：　6/15, 22, 29, 7/6, 13, 20, 27

## Ｃ．成績評価

成績は、演習の前半と後半のそれぞれの平常点（発表担当などによる演習への積極的な参加の度合い）を総合することによって判定するが、前半と後半のいずれにおいても、レポート課題を課する場合がある。

## ＜導入＞宗教改革の意義

### （１）宗教改革の概要

１．プロテスタンティズムとは何か

・原理としてのプロテスタンティズム（宗教史の構成要素）

・歴史的プロテスタント（教派・組織として）

・プロテスタント時代（プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代）

２．宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

1517 年 10 月 31 日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状（いわゆる免罪符）に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「９５箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった（思いがけない波及効果）。

３．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に連関し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

４．人間は何によって救われるのか？

・行為義認

・人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのか。

贖宥の論理、罪や恩寵についての実体論物的理解

・「信仰のみ」＝信仰義認論（信じる心の純粋さという個人の人格性）

パウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。

cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。

５．理念と現実の緊張

階層的秩序の存続

信仰の自己決定と聖書の情報公開に関連して。

６．聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及（識字率）

７．市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

聖書の近代語への翻訳　→　西欧国民文化の基礎

＜参考文献＞

１．ルター　『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。

２．金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。

３．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館、『科学と宗教』教文館。

４．金子晴勇、江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
５．徳善義和『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』岩波新書。
６．日本ルター学会編『宗教改革者の群像』知泉書館。

**（２）宗教改革の評価**

・ハンス・キュンク**『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』**（新教出版社）より、

１．「カルティン・ルター――パラダイム転換の古典的事例としての福音への回帰」
193-236 頁

・なぜルターの宗教改革にいたったのか
・基本的な問い――神の前でいかにして義認されるのか
・カトリック的ルター
・宗教改革の火花
・宗教改革プログラム
・宗教改革の根本的動機
・宗教改革のパラダイム
・神学の基準

２．「ルターの正しかった点」
・「義認」とは、・・・神の決定であり、この決定において神は、神なき人間に対してその罪を勘定に入れず、彼をキリストにおいて義と宣言し、まさにそれによって現実に義とする。
・「恩寵」とは、・・・神の生ける愛と慈しみであり、イエス・キリストにおいて明らかになった、神の人格的な、そしてまさにそのようにして人間を作動的に規定し変化させる行為である。
・「信仰」とは、・・・人間が全人的に神に信頼しつつ献身することである。この神は・・・ただ信仰のみによって恩寵をもって義としてくださる。・・・彼は、くりかえし新たに赦しを必要としており、ようやくその完成の途上にあるにすぎない者である。
３．「ルターの宗教改革の問題をはらんだ帰結」
・最初に存在していた宗教改革の感激は、間もなく燃えつきてしまった。
・宗教改革は、政治的抵抗勢力の強大化に直面した。
・プロテスタントの陣営自体が、統一を守りつづけることができなかった。
４．宗教改革の分裂
５．教会の自由？
・領邦君主は、自分自身の支配地域における教皇のようなものになってしまった。
・そこで実現したのは、キリスト教的には怪しげな領主による教会支配であって、・・・
６．中世から近代への歴史的展開過程に宗教改革は位置することを理解することが重要になる。